

平成28年度市自委第1号協働パイロット事業
「障がい児・者が専門機関から地域歯科医院へ
円滑に移行できるように」

NPO法人ホスピタル・プレイ協会
すべての子どもの遊びと支援を考える会



HPS Japan
Hospital Play Specialist

I 事業の趣旨・目的

1. 趣旨

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト（以下 HPS）は、遊びを用いて病気や障がいのある人々に「やさしい医療」を提供する英国生まれの専門職である。NPO 法人ホスピタル・プレイ協会では、日本における HPS の唯一の職能団体である。HPS は、全国の子ども病院などで勤務し、子どもにやさしい医療の実現のため、小児医療チームの一員として日々活躍している。処置や検査に対して恐怖心や不安を抱く子どもたちの療養環境を改善する支援を行い、その結果、医療とかわかる子どもたちが医療に対する信頼を持ち続けることができている。当法人ではこれまで日本で唯一の HPS の養成校である静岡県立大学短期大学部と協働し、医療の中にホスピタル・プレイを取り込む支援の普及と啓発を行ってきた。

平成 26 年度の協働パイロット事業『障がい児・者に対するやさしい歯科治療を実現させるために』では、障害福祉課、健康づくり推進課と協働し、障害者歯科保健センター（以下、歯科センター）において HPS による障がい児・者にやさしい歯科医療モデルを展開し、歯科分野における医療環境の改善に取り組んできた。障がい児・者の歯科医療の受診を円滑に行う事業を実施して得た知見として、歯科診療所の環境が障がい児・者には、過度の緊張や恐怖を与えることがわかった。当法人は、障がい児・者専門歯科医療機関の環境を障がい児・者や家族にやさしい環境の整備に取り組み、歯科センタースタッフとの協働関係を通じて多職種が連携し、直接、患者に対して「遊び」などを用いて緊張を緩和し、不安感や恐怖心を軽減することにより、円滑な歯科医療受診への支援を提供することもできた。

しかしながら、地域の歯科医院では上述のような治療が行われているとは言いがたい状況にあると思われる。専門機関である歯科センターの慢性的な混雑状況の改善と早期に歯科治療を行うことでの障がい児・者の負担軽減のため、平成 27 年度より『障がい児・者が専門機関から地域歯科医院へ円滑に移行できるための協働パイロット事業』を企画した。

また、静岡市障害者歯科保健推進会議（静岡市主催）静岡市障害者歯科保健推進事業にて、平成 27 年 10 月より静岡市静岡歯科医師会が運営する歯と口の保健医療センター（以下、救急歯科センター）において歯科センターの患者で協力度が向上し、地域歯科医院を受診することが可能であると思われる患者を対象として「障がい者歯科地域移行支援事業」が計画された。この事業にホスピタル・プレイのノウハウを活用することで、地域歯科医師会、歯科センター、行政、NPO が協働し、障がい児・者専門の歯科医療機関から、地域歯科医院への移行を円滑に進めることができると考え、今年度も継続して取り組むこととした。

さらに、地域歯科医療機関のスタッフに対しても障がい児・者へのやさしい歯科治療の支援方法などを直接アドバイスすることもできると考える。

2. 目的

地域歯科医師会、行政、歯科センター、NPO 法人ホスピタル・プレイ協会の協働によ

り障がい児・者が専門機関である歯科センターから以外の地域歯科医療機関で安心して受診することができる。自宅近くの地域の歯科医院へ安心して円滑に移行できる。

II 事業概要

- (1) 事業期間 平成28年4月から平成29年3月まで
- (2) 実施箇所 静岡市障害者歯科保健センター（歯科センター）
静岡市静岡歯科医師会「歯と口の保健医療センター」（救急歯科センター）
移行先の地域歯科医院 静岡市立清水病院 静岡市立静岡病院

III 実施スケジュールと実施内容

1. 現状把握（9月まで）

- ① 障害者歯科地域移行推進事業の概要を把握
- ② 救急歯科センターの環境を把握
- ③ 対象者の情報収集

2. 実施（10月から3月）

- ① 対象者の歯科センター及び救急歯科センターで行われる診療の支援を行い、更に、地域の歯科医院への受診に付き添い支援する
- ② 地域移行を円滑に進めるために、地域の歯科医院から紹介の障がい児・者も地域移行の対象者とし、治療・受診トレーニング後に、家族の希望する地域の歯科医院に戻るよう支援を実施（入院での全身麻酔による歯科治療への支援も含む）

(1) 障がい児・者への個別対応

- ① 初めての環境・初めての地域の歯科医療スタッフとの出会いや診療に不安なく望めるよう写真ブックや見学などを活用し歯科受診適応トレーニングを個別に実施し、地域歯科医院に不安なく移行できるように付き添い支援する
- ② 地域の歯科医院から紹介の障がい児・者の全身麻酔による歯科治療の際も術前検査も含めた支援を行い、障がい児・者の不安・恐怖の軽減とその後の歯科受診トレーニングを段階を踏んで支援する

(2) 歯科センタースタッフ、救急歯科センタースタッフ、移行先地域歯科医院スタッフ、入院先病院スタッフとのチームとしての関わり

- ① 救急歯科センター会議室でのトレーニング診療前後のミーティングに参加
- ② 移行先歯科医院にて医療スタッフとトレーニング診療前後のミーティング実施
- ③ 全身麻酔による歯科治療の入院先病院での事前の打ち合わせ

(3) 受診を促進するツールなどの開発と作成

- ① 救急歯科センター・移行先地域歯科医院・静岡市立静岡病院・静岡市立清水病院のプレパレーション用写真ブック作成
- ② 個別のソーシャル・ストーリーブック作成

- ③ 術前検査用プレパレーションブック、入院治療用プレパレーションブック、検査カード等作成
- ④ 対象者への遊びを用いたアプローチのための情報収集とツールの準備
- (4) 事業成果指標の作成 (H29. 3月)
前年度に地域移行に関するアンケート調査を実施したため、今年度は全身麻酔による歯科治療への HPS の支援に対する患者および家族、関係スタッフへの満足度調査を実施
- (5) 歯科センター、救急歯科センタースタッフ及び地域歯科医療従事者研修
 - ① 7月29日 事前研修 救急歯科センター会議室
 - ② 1月27日 院内研修 救急歯科センター会議室

*倫理的配慮

写真の掲載については障がい児・者、保護者に対し、口頭と文書により説明し、プライバシー厳守を約束し、了承を得た。

IV 実施の結果

今年度は、地域移行に対しての、ご家族の了解が難しく、なかなか対象児が決まらなかった。そのため、予定した取り組みに入るのが遅れ、7月に事前研修を行ったが、取り組み開始は10月から14歳女児(ダウン症)・6歳男児(自閉スペクトラム症)の2名の障がい児・者を対象として、前年度同様、歯科センターの歯科医師・歯科衛生士、救急歯科センターの歯科衛生士、地域の移行先歯科医院の歯科医師・歯科衛生士とHPSが連携し、個々の障がい児・者にとって最善の方法で地域移行が進むよう診療トレーニングを重ね、それぞれの職種が専門性を活かしながら協働し、地域移行が段階を踏んで進められるよう取り組んだ。HPSは本人の興味のある遊びや物を用いて、信頼関係を築き、個別のソーシャル・ストーリーブックを作成し、これから行われることへの心の準備や振り返りとして用いた。更に初めての環境・初めての人達への不安が軽減できるよう救急歯科センター内や移行先歯科医院内を撮影した「写真ブック」を作成し、事前に障がい児・者、家族と一緒に見たり、それぞれの院内見学を実施した。

また、当歯科センターでは、障がい特性により長時間の治療が難しいと思われる障がい児・者に対して、静岡市立静岡病院、静岡市立清水病院に当歯科センターの歯科医師や歯科衛生士が向き、手術室にて、全身麻酔による歯科治療を行っている。今回、障がい児・者の地域移行の取り組みの一環として、新たに地域歯科医院からの紹介により、全身麻酔での歯科治療を行う障がい児・者に、HPSが関わり、術前検査や入院治療の場でも医療に対するトラウマ体験とならないように支援し、その後の歯科治療も円滑に進むことにより、再び地域の歯科医院へと戻ることが出来るように術前検査、全身麻酔治療前日・当日の支援を8名の障がい児・者を対象に実施した。

事例1 地域移行支援

6歳男児(自閉スペクトラム症) A児

歯科センターでは、診療も協力的に出来ていた。10月、12月と2回の歯科センターでのHPSとの関わりA児とのコミュニケーション作りを行った。毎回妹も一緒に来て、付き添い、A児も心強く思っていたようだった。2回目の歯科センター受診後、待合室にて、A児、母、妹と一緒に次回よりトレーニングを行う救急歯科センターを写真ブックにて紹介する。A児も妹もとても興味を示し、よく見ていた。次いで見学に行こうと誘い、ご家族と一緒に見学に行く。少し緊張しながらも院内を見て回り、3つの椅子の中で気に入った椅子に座ってみることにした。妹と交替で椅子の上で寝たり、口を開けたりして遊び、明るい表情で帰院した。1月、3回目から救急歯科センターでの受診（移行トレーニング）となった。待合室にてソーシャル・ストーリーブックにて、これまでの出来ていることを確認や振り返りを実施し、再度、救急歯科センターの写真ブックを見た。その後、移行先の歯科医師や歯科衛生士をご家族に紹介した。A児は笑顔で診療室に入り、椅子にもスムーズに座り、医師が移行先の医師に交代しても、協力的に診療を受けていたが、終始、緊張した表情であった。最後に出来たことをみんなで褒めると、やっとほっとした表情になった。待合室に戻ろうとすると今後は妹が納得しない様子で全く動こうとしない。前回は妹も一緒に椅子に座って遊んだので、自分もやりたいのだと察した。兄同様に椅子に座り、水平位になったり、口を開けたりすると機嫌が戻り終了する。待合室では、会計を待つ間、A児、妹と一緒にプレイコーナーで遊び、緊張した気持ちの解放を図った。3月、4回目の受診は母と二人での来院。待合室にてソーシャル・ストーリーブックにて振り返りを実施し、次回より受診する移行先歯科医院の写真ブックを家族も一緒に見た。診療室に入り、最初に椅子が倒れる様子を見ることにしたが、A児はこれまでは、フラットの診察台での診療だったために、不安が強くなってしまった。そのため最初からフラットにすると、納得して水平位になることが出来、緊張しながらも、新たな移行先の歯科医師の診療を受けることができた。この日も終了後は、プレイコーナーで少し遊び、気持ちを開放して、帰院した。次回はいよいよ4月6日に移行先歯科医院の受診予定となっている。

その他、昨年12月に14歳女兒（ダウン症）が地域の歯科医院への移行が進み、家族の同意もありHPSの支援が終了となった。

事例2 全身麻酔による入院歯科治療の支援

20歳女性（知的障害）Bさん

Bさんは、以前、他病院での採血の際、興奮してパニック状態になった経験がある。今回の術前検査も採血が含まれ、本人の拒否が予想された。歯科センターにて術前検査前日に写真ブックにて目的（理由）や手順を話した後、実際に行われる順番で玩具の注射器を用いて練習した。Bさんは落ち着いて話も聞き、模擬採血も緊張しながらも出来た。翌日清水病院にてレントゲン、心電図等の検査を実施。採血は拒否があり座り込んでしまった。練習だけということで、採血室に行き、スタッフの方に針刺しのみ行わず、本番と同様のことをして頂いた。「練習だけ」という安心感もあるのか、落ち着いて出来ていた。次回は本番と約束し、入院病棟の見学に行った。

後日、採血のみ実施するため、再び清水病院受診。何とか病院には来たものの、最初から「やらない」の一点張りで採血室前廊下から全く動こうとしない。何とか「もう一度練習する」ということで採血室に行き、練習をした。続いて「今度は本番だよ」と話すと、すぐに手を引っ込めて「嫌だ、やらない」と言い張る。HPSがBさんを前から抱きかかえ「嫌だね」とBさんの気持ちを受け止め、事前に話した「なぜしなければいけないか」との理由を再度告げた。Bさんは理由は理解されており、しばらく待った後、自分から恐る恐る手を差し出した。採血室スタッフも「痛くないようにするね」とみんながBさんを応援する雰囲気が高まり、すぐに終了。スタッフ全員でBさんの頑張りを認め、ほめてくれた。Bさんもとても誇らしげだった。全身麻酔歯科治療当日、点滴は麻酔後ということで、Bさんも安心していった。オペ室で本人の希望した「鬼のパンツ」の歌を聴きながら眠った。終了後は帰室時から興奮状態だった。母に添い寝して頂いたが、身体が大きい上に、力もあり、手足の動きも激しく、母が振り回されてしまう。母の許可を得て、HPSが添い寝し、Bさんの手を握りBさんが「帰りたい」、点滴を「取りたい」という度にBさんの言うことを受け止め「帰りたいね」「取りたいね」と繰り返した。しばらく繰り返しているうちに落ち着き、Bさんが母を求め、母に添い寝を交代し、しばらく様子を確認してHPSは帰院した。Bさんは、その後、歯科センターにて継続診療中であるが、地域移行はもう少し時間がかかりそうである。

事例3 入院歯科治療後から地域移行への支援

6歳男児（自閉スペクトラム症）C児

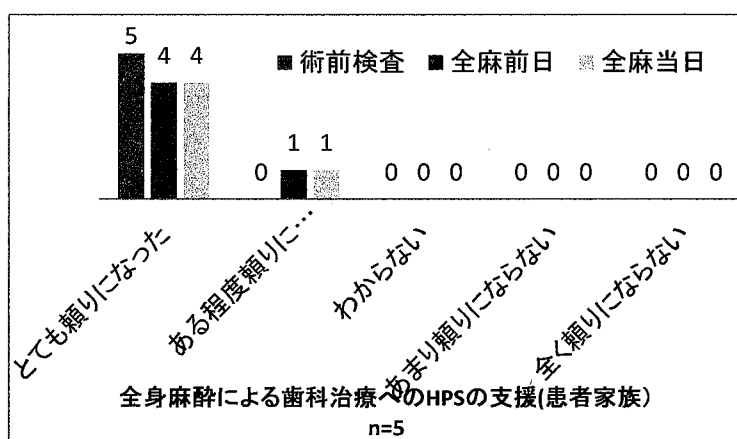
C児は、地域の歯科医院に数回通っていたが、毎回逃げ出し診療を受けられず、歯科センターに紹介となった。母は、当初「どのように本人の気持ちを持って行けば良いか方法が見つからない」と困っていた。C児は、支援室（プレイルーム）では最初から活発に遊んでいたが診療室に誘うと拒否があった。C児は静岡病院にて全身麻酔による歯科治療を受けた。その後のC児へのトレーニングは、第1段階として支援室で、ぬいぐるみへの歯磨き・ミラーをすることから始めた。支援室は遊ぶ場所でC児も大好きな場所なので、すんなりと誘いに応じ、笑顔でぬいぐるみの歯に水性マジックで虫歯を描き、歯磨きをして、きれいにし、ミラーで見て確認した。次いでHPSが「次はC君の番だよ」と促すと自ら、ぬいぐるみの台にのり、ニコニコしながら水平位になり、歯科衛生士からの歯磨き・ミラーも笑顔で出来た。第2段階は「ぬいぐるみの台にて歯科医師からの歯磨き・ミラー・診査を受ける」とした。最初は歯科衛生士からの歯磨きまでは順調に出来るも、歯科医師が顔を見せると急に警戒して起き上がってしまったり、不安な様子が見られたが、C児の好きなアンパンマンの仕掛け絵本にてHPSが遊びを用いて関わることで歯科医師からの歯磨き・ミラー・診査も次第に笑顔で出来るようになっていった。第3段階は「診療室・診療台に慣れる」とした。最初はC児の好きなアンパンマンのキャラクターの絵を診療室入口から診療台までの間に貼り、それを探しながら診療台まで行き、診療台に予め並べて置いた玩具で、楽しそうに遊んだり、水平位になってアンパンマン絵本を読んだりして、次第に診療

台で水平位になることに慣れていき、水平位にてアンパンマン絵本や歌絵本などで遊びながら歯科衛生士による歯磨き・ミラーを嫌がらずに行えるようになっていった。

次の来院時より待合室の椅子の上にぬいぐるみを座らせ待つ事にした。C児は笑顔で来院し、ぬいぐるみの隣に座った。歯磨きやミラーが入っている箱を見せ「今日は、どれをやる？」とC児に今日やりたいことを選んでもらった。C児は箱に入っていた歯磨き・ミラーの両方を選んだ。(毎回新しいものを追加して入れておく)次に「ぬいぐるみとC君とどっちが先に診てもらおう？」と聞くと「ぬいぐるみ」とのこと。自分で選んだ好きな絵本を持ち、診療台に行き、ぬいぐるみが先に歯科衛生士より歯磨き・ミラーをしてもらい、C児はその間、自分の好きなアンパンマン絵本をぬいぐるみに見せながら、これから自分が行う診療を目で確認していた。歯科医師も近くに座り見ていた。次にC児の番になり、自分から水平位になった。今度はHPSがアンパンマン絵本をC児に読み、気晴らし遊びと精神的安定を図った。歯科衛生士からの歯磨き・ミラーが笑顔で終了し、本人も満足そうな表情を見せていた。次からも同様にして診療台に向かう。第3段階は「歯科医師からの診療を受ける」とし、歯科衛生士が座っていた位置に歯科医師が座り、ぬいぐるみを先に診療し、次にC児の番で同様の診療をした。今から行われることがぬいぐるみの診療により、理解できているせいか、水平位にも抵抗がなく、絵本を見ながら、歯科医師よりの歯磨き・ミラー・診査・処置も笑顔で出来るようになった。現在、地域の歯科医院とは、既に連絡を取り合い、移行するための最終的な準備を進めている。

1. 事業成果指標

(1) 障がい児・者、家族へのアンケート調査結果 (8名中5名より回答が得られた)

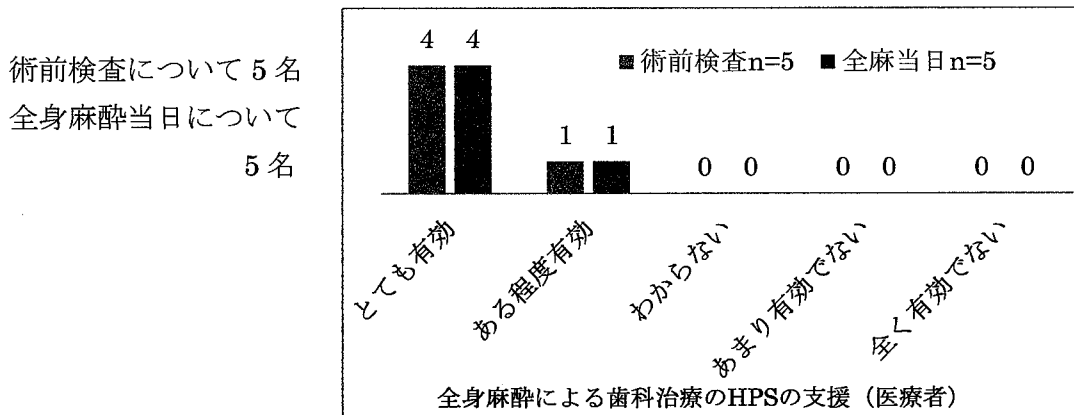


感想

- * いろんな支援をして頂き、本人も安心して治療を受けられました。(親も安心) ぜひ、続けられるものなら続けてほしい事業だと思います。
- * とても助かりました。母1人で子どもを何人も世話しているので、気持ち的にも凄く頼りになる存在でした。終了してしまうのはとても残念です。再開できればいいと思う。

- *当日だけではなく、前後もかなり御世話になりました。治療の事だけではなく、他の事でも、いろいろとお話を聞いてもらいアドバイスをしてもらい、とても心強かったです。とても頼りになる支援をして頂いたのが終了してしまうのは残念。またいつか、難しい治療などあった時に、どんなところに相談や支援をしてもらえるかなど不安になる。
- *初めての経験で、親も子も不安でしたが、診察時から子どもの好きなものを取り入れて頂き、検査や入院の際も目で見てわかりやすいように準備して下さい、当日望むことが出来ました。今後も当然のように支援して頂けると思っていました。私たちのように支援を必要としている方が、まだまだいらしゃると思うので、支援が終了してしまうことは非常に残念です。
- *絵カードなどで検査の順番を先に教えてくれたので本人にとっても心の準備ができて、よかったです。順番や今からやることがわかると不安はあるものの納得できる面も多く、私もやり方を参考にしようと思いました。病院などでは、障がい理解があっても、扱いに慣れてないことも多いので、いろいろな子たちを見てきて分かっている HPS さんをやめてしまうのは、とても残念です。

(2) 静岡市立清水病院 関係スタッフへのアンケート調査



感想

① 術前検査スタッフ

- *患者様にとっても、病院スタッフにとっても大変有効です。支援の終了は、とても残念です。
- *採血検査が大変スムーズにできました。継続を希望します。
- *環境によって精神状態が大きく左右される自閉症患者にとって HPS のメリットは極めて大きい。検査が従来に比べ格段にスムーズに実施できた。この支援システムは極めて有効であり、ぜひ今後も継続されることを希望します。

② 全身麻酔治療当日スタッフ

- *母親のみの付き添いよりも患者様が落ち着いて手術室に入れたように思います。

2. 地域歯科医療従事者研修開催（7月29日） 19名

参加者：地域移行先歯科医院医師・歯科衛生士、歯科センター医師・歯科衛生士、
歯と口の保健医療センター歯科衛生士、NPO 法人ホスピタル・プレイ協
会 HPS

講師：服部 清（静岡市障害者歯科保健センター）／松平 千佳（当法人理事長、
静岡県立大学短期大学部 HPS 養成事業責任者）

会場：救急歯科センター内会議室

院内研修開催（1月27日） 14名

参加者：静岡市障害者歯科保健センター医師・歯科衛生士
歯と口の保健医療センター歯科衛生士
NPO 法人ホスピタル・プレイ協会理事長・HPS

講師：ヴリジット・ドゥーリー

作業療法士・チャイルドプレイセラピスト（オーストラリア）

エマ・イードリー バーミンガム子ども病院 HPS

松平千佳 NPO 法人ホスピタル・プレイ協会理事長、静岡県立大学短期
大学部 HPS 養成事業責任者

会場：救急歯科センター内会議室

3. 今後への提言

地域移行を進めるためには、地域歯科医療従事者に対し、HPS を含めたチーム医療について研修を行うことが重要である。HPS の存在を地域の歯科医療の分野にも認知してもらい、共に「障がい児・者にやさしい歯科治療」を考え・学び、一人でも多くの障がい児・者が自宅の近くの歯科医院にて不安なく診療ができる体制やチーム作りをおこなう必要がある。今回実施したアンケート調査結果から見えてきた障がい児・者や家族の気持ちを理解し、1日も早い支援体制の確立が望まれる。それが、慢性的な混雑状態となっている専門機関である歯科センターの課題の緩和にもつながると考える。

4. 考察と感想

歯科センターでは、慢性的な混雑状態にあるという課題を抱えており、前年度以前よりこの課題に取り組んでいる。この課題の要因は3つ考えられる。1つ目は障がい児・者の家族は慎重で専門機関である歯科センターへの信頼が強く、他の歯科医院への移行が難しい事。2つ目は本人・家族が他の歯科医院への移行に対しての不安がある事。3つ目は障がい特性により地域の歯科医院では対応が難しく、専門機関である歯科センターに紹介され、患者が増していく事である。今年度の

実施でも、1つ目、2つ目の要因と思われることにより承知してくれる対象者は少なく2名であった。そこで、3つ目の要因である地域の歯科医院よりの紹介の障がい児・者を対象として受診トレーニングや治療への支援を進め、地域の歯科医院に戻す地域移行を提案し、取り組むこととした。事例にあるように、紹介の障がい児・者は障がい特性から歯科受診困難となり、う蝕も進み全身麻酔による歯科治療が必要となる事例も多くみられ、入院による歯科治療の支援の必要性も出てきた。今回、救急センターでの移行トレーニングを行い地域移行となった2名の障がい児・者及び全身麻酔での歯科治療への支援を行った9名の障がい児・者に対し、HPSは障がい児・者との信頼関係づくりを重視して関わり、プレイ・プレパレーション、ディストラクション、ソーシャル・ストーリーブック等の専門的な手法を用いて障がい児・者や家族の不安軽減を図った。障がい児・者は個別に特性があり、その支援は様ではない。その都度、個々に合わせた有効な支援を模索しての支援であった。障がい児・者、家族からのアンケート調査結果からも、病院受診、検査、入院、手術等、どれ一つ取っても、大変さがあり、HPSの配属のない病院では、個々に対応したHPSの支援の必要性を強く感じた。無事に全身麻酔により歯科治療が進んでも、その後の受診トレーニングにも、また時間が必要とする。地域に戻るための取り組みには、相当な時間が必要であると感じた。

今回の事業において地域移行が完了した障がい児・者は1名、4月にもう1名、現在移行の準備が始まった児が1名と3名の移行が決まったところである。

地域の移行先歯科医療スタッフ、救急歯科センタースタッフ、歯科センタースタッフ、静岡病院スタッフ、清水病院スタッフ、HPSが、それぞれの場において連携し、チームとしての関わりが障がい児・者や家族にとって不安の少ない、安心できる体制となったのではないかと考える。

VI 協働・協力機関

静岡市障害者歯科保健センター（歯科センター）

歯と口の保健医療センター（救急歯科センター）

地域歯科医療機関

静岡市立静岡病院、静岡市立清水病院

VII 担当スタッフ

(1) 事業総括：松平千佳 静岡県立大学短期大学部 社会福祉学科 准教授、HPS 養成事業責任者／NPO 法人ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会 理事長

(2) トレーニングスタッフ：中山陽子 NPO 法人ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会 ホスピタル・プレイ・スペシャリスト

在宅支援部門スーパーバイザー

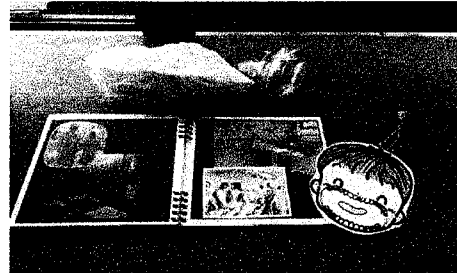
(3) その他(事務担当): 南 伸予/NPO法人 ホスピタル・プレイ協会 事務長
大長 友妃子/静岡県立大学短期大学部 HPS 事務局

添付資料



地域移行の打合せ

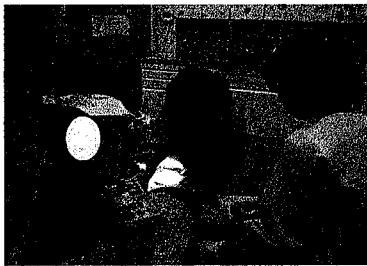
地域歯科医院医師・歯科衛生士
歯科センター医師・歯科衛生士
救急センター歯科衛生士、 HPS



全身麻酔による歯科治療の

プレパレーション用品

写真ブック、酸素マスク・キャップ
本人用歯科治療部位の絵カード



入院治療後の歯科受診トレーニング 1

児がぬいぐるみにディストラクション
(次に自分に行われることを目で確認)



ソーシャル・ストーリーブック



入院治療後の歯科受診トレーニング 2

HPS が児にディストラクション
(気晴らし遊びと精神的安定)

ソーシャル・ストーリーブックの 定義と目的 (1993年グレイ)

定義

ある特定の状況・技術・概念について一定の決まった様式に従い、一般的に求められる反応・理解・行動の在り方について説明するもの

目的

対象者が、求められる行動・反応について、たやすく理解出来る事
辛抱強い姿勢で、かつ支援的・肯定的な方法を適して理解してもらうことにある